

第 51 回全国学校保健・学校医大会研究発表者

第 3 分科会「からだ・こころ (3)」

ANA クラウンプラザホテル富山 3 階・ASUKA の間

〔座長〕 射水市医師会会長 木田 和典

富山市医師会理事 八木 信一

発表順	演題名	研究発表者名	
1	発達性読み書き障害(ディスレクシア)を抱える子どもたちのためのトレーニングソフトの開発および書籍	埼玉県医師会	平 岩 幹 男
2	新型コロナウイルス感染症発生時の学校と福祉保健所との連携	高知県医師会	吉 川 清 志
3	高知県の新型コロナウイルス感染症対策における子どもの心のケア : 医療—教育連携を中心に	高知県医師会	高 橋 秀 俊
4	守口市 5 歳児健康診査巡回支援事業の取り組み	大阪府医師会	森 口 久 子
5	学校メンタルヘルス活動からみえてきた学級崩壊の構造と対策	三重県医師会	梅 本 正 和
6	西宮市児童におけるインターネット依存の実態調査	兵庫県医師会	前 寛
7	睡眠育成士の活動について	愛知県医師会	中 山 明 峰

第3分科会「からだ・こころ（3）」

3-1. 発達性読み書き障害（ディスレクシア）を抱える子どもたちのための トレーニングソフトの開発および書籍

埼玉県医師会・Rabbit Developmental Research 代表 平岩 幹男

発達性読み書き障害（ディスレクシア）は特異的学習障害の中では最も多く、欧米では人口の2～5%といわれるが、欧米に比べてひらがな、カタカナ、漢字など多くの文字種を持つわが国ではより多い可能性があるし、臨床では未診断・未対応の子どもたちにしばしば遭遇する。これらの子どもたちは基本的に知的な遅れはなく、音声言語（聞く、話す）には問題がないにもかかわらず、文字言語（読む、書く）での困難さを抱える。就学後に発見されることが多いが、多くはそのまま経過を見られている。この病態に対してわが国で初めて音声認識エンジンを搭載したゲームソフトを開発し、それとコラボする書籍を発行してトレーニングを行うことができるようになったので報告する。

3-2. 新型コロナウイルス感染症発生時の学校と福祉保健所との連携

高知県医師会・土佐希望の家 医療福祉センター長 吉川 清志

高知県医師会：石黒 成人、武田 丘

高知県安芸福祉保健所：福永 一郎

高知県の新型コロナウイルス感染者は現在までに74人で、小児4人はすべて成人からの感染であり重症者はなかった。そのうち1例は小学生であり、濃厚接触者としてPCR検査が実施された段階から、学校と福祉保健所は緊密に連携して対応した。感染児の保護者への情報提供、保護者説明会の開催、濃厚接触者の選定とPCR検査、マスク対応、プライバシー・心の問題・風評被害対応などを行った。学校（県及び市町村教育委員会）、市町村行政、福祉保健所は情報を共有し、適切に危機管理を行わなければならない。私たちは学校医として、教職員を含む校内感染者発生時に適切に対応するために、予備知識を持っておくべきと考え経験を報告する。

3-3. 高知県の新型コロナウイルス感染症対策における子どもの心のケア ：医療－教育連携を中心に

高知県医師会・高知大学医学部寄附講座児童青年期精神医学 特任教授 高橋 秀俊

高知大学医学部小児思春期講座教授：藤枝 幹也

高知県小児科医会会長：船井 守

高知県医師会園医学校医部会：吉川 清志、石黒 成人、武田 丘

新型コロナウイルス感染症によって、子どもを取り巻く家庭や学校などの生活環境は激変し、子どものメンタルヘルスに対して教育・福祉・医療を含む多領域からのサポートが求められている。令和2年4月に全国に緊急事態宣言が発令され、学校では長期の休校を強いられ、子どもたちは外出の自粛を要請された。同年5月に規制は少しずつ緩和され、学校も徐々に再開したが、子どものメンタルヘルスに様々な課題が認められている。そのため、高知県医師会・高知県小児科医会・高知大学医学部小児思春期講座・高知大学医学部寄附講座児童青年期精神医学の四団体は、学校が再開されるタイミングに合わせて、学校再開後の子どもの心のケアに関して、高知県教育委員会に提言を行った。本演題では、この提言にいたった背景や、その後の対応について医療－教育連携を中心に説明し、今後予想される第2波、第3波の対策について検討する。

3-4. 守口市 5 歳児健康診査巡回支援事業の取り組み

大阪府医師会・医療法人誠心会森口医院 院長 森口 久子

福島 忍、佐藤 睦恵、房岡 徹、黒川 清、中尾 正俊
益田 元子、田中 英高、福田弥一郎、茂松 茂人
守口市健康推進課、守口市医師会、大阪国際大学、大阪府医師会

平成 17 年に施行された発達障害者支援法の下、守口市に於いても 5 歳児健診に対する取り組みが始まった。守口市ですでに母子保健事業として行われている健診に加え、発達の偏りを持つグレーゾーンの子どもたちに良質な保育を行う事で育ちを支え、就学後の集団生活での困難の減少につながる事を目的として平成 27 年度より守口市の公立の幼稚園、保育所における 5 歳児健診巡回支援事業が開始された。2 年の経過を経て平成 29 年度秋から 5 歳児保護者事前アンケートのみ実施している私立幼稚園 1 園を除くすべての公立・私立の幼稚園、認定こども園等で 5 歳児健診巡回支援事業を実施することができた。保護者に対する事前アンケート、秋の巡回健診、春の巡回支援、保護者への支援、就学後の経過観察を一連として定着させることができた。その結果、要支援者に対して医療機関、療育機関、学校との連携をとることが可能となった。今後は就学後の支援に繋げる取り組みに拡大してゆくことが望まれる。

3-5. 学校メンタルヘルス活動からみえてきた学級崩壊の構造と対策

三重県医師会・うめもとこどもクリニック 院長 梅本 正和

三重県医師会・駒田医院：駒田 幹彦
国立病院機構三重病院小児科：大橋 浩
三重県教育委員会：貞光 祐子

これまで、アンケートを用いて学校メンタルヘルス活動をおこない、自己内面をみる重要性を指摘してきた。今回、①小学校のクラス編成後、高学年で学級崩壊となった要因と、②中学校での自尊感情をあげるための工夫に関して報告する。小学 6 年生のクラス編成のため、問題行動のある男子 6 名を均等に配分したが、あるクラスが学級崩壊となった。その組には希死念慮をもつ女子が 7 名も在籍しており、居心地度は悪化し意欲の低下がみられた。一方、問題行動の男子 2 名の居心地度は良くなり、問題行動は悪化した。中学校では、希死念慮の人数が改善したクラスでは自尊感情点数が上昇しており、どのような策がとられたかを分析した。結論：①クラス編成では、事前の健康度チェックによる内在性問題の把握が重要なこと、②自尊感情をあげる具体的な方策の獲得がわかった。

3-6. 西宮市児童におけるインターネット依存の実態調査

兵庫県医師会・西宮市医師会学校保健委員会 委員長 前 寛

西宮市医師会：会長 大江与喜子、副会長 伊賀 俊行
理事 谷口 賢蔵、理事 米倉 康博
学校保健委員会：副委員長 折山 文子、委員 下竹 敦哉
委員 増田 基子、委員 満田 基温

【はじめに】近年小児においてもネット依存が社会問題となっており、実態を調査するためにアンケート調査を行った。

【対象と方法】西宮の市立小学 5 年生 277 人と中学 2 年生 449 人にアンケートを行った。ネット依存の評価はキンバリー・ヤング博士が作成した Internet Addiction Diagnostic Questionnaire を用いた。ネット依存と判定した児童と非依存と判定した児童で健康被害の有無を中心に比較検討した。

【結果】ネット依存と判定した小学生は 7.9%、中学生は 11.6%であった。健康被害は小学生で依存の

児童が肩こり腰痛、全身倦怠感で有意に健康被害を認めた。中学生では胃腸障害、頭痛、肩こり腰痛、気分不良、全身倦怠感の調査項目全てで有意に健康被害を認めた。

【考察】年齢とともにネット依存による健康被害が顕著となると考えられ、小学生からネット依存に陥らないような対策が必要である。

3-7. 睡眠育成士の活動について

愛知県医師会・仁愛診療所・名駅睡眠医療センター・センター長 中山 明峰

松川クリニック理事長・名古屋市学校医会会長：松川 武平
東邦大学看護学部社会疫学研究室教授：坂本なほ子

現在約 60 万人の引きこもり、そして約 40 万人の不登校児童がいると言われ、不登校児童は引きこもりの予備軍になる可能性がある。不登校児童はしばしば睡眠医療センターや小児科に受診し、朝が起きることができないため不登校になると保護者が訴える。

最近、睡眠不足や睡眠リズムの乱れている児童生徒は非常に多い。

2018 年より市民講座を開き、年 5 回の睡眠講習を受け、認定試験に合格した参加者に対し、睡眠育成士という資格を作った。この睡眠育成士は主に睡眠の基礎を学び、小学校から要請を受けた場合、子ども達に睡眠の教育を施すボランティア活動である。

これらの活動は開始したばかりではあるが、その一歩を紹介させて頂く予定である。